



聖歌集改訂ニュース

私たちの“ヒムエクスプロージョン”はいつ?

現行の古今聖歌集を紐解いて見ると、そのタイトルが物語るように、様々な時代の様々な国の詩、曲が収められていることに気がつきます。エキュメニカルという言葉はこの十年位のうちに盛んに使われるようになりましたが、聖歌の世界ではもうとっくに「エキュメニカル」が実現されていて、私たちは、この聖歌はカトリックのものだ、これはルーテルで、これはメソジスト……と、あらためてその聖歌を生み出した教派を思って歌うことはありません。私たちの親しんでいる聖歌は、信仰の歌、宣教のために作られた歌、様々な礼拝を想定して作られたものなど、そのどれもが神への感謝、賛美、信仰の表現、また宣教のみ業への参加、という目的に関しては同じだからでしょう。

このようなキリスト教音楽、ことに聖歌の広がりや国境、大陸を超えて地球大になっているのに対して、歴史という縦の流れを見ても、古今聖歌集では詩においては3世紀に遡るもの、曲においてはグレゴリオ聖歌が成立したといわれる11世紀からと、それぞれ1700年、900年という長い歴史の中で生まれた聖歌を、私たちは歌っています。

そこで古今聖歌集ひとつひとつを調べてみると、詩曲ともに、19世紀、ことに1800年代半ばに書かれたものが全体の約半分に近い数を占め、それに対し20世紀に生まれたものは5分の1以下でした。1959年版ですから、

20世紀のものが少ないことはある程度し方がないことでしたが、残念ながら大きな世界戦争を経験した後に生まれた聖歌としては、当時の人々や社会を反映したものはありません。

欧米では1970年代から“ヒムエクスプロージョン”と呼ばれる、聖歌が爆発的に生まれた動きがあり、その後もいまだにその状況が続いているともいえます。それは、様々な宣教の場でどうしても必要を感じて生まれてきた聖歌でした。例えば改訂古今聖歌集試用版の2002番、2046番、2089番、2117番はいずれもスコットランドにある、アイオナという共同体から生まれた聖歌です。そこでは社会から落ちこぼれた人々と生活を共にして宣教活動をしているキリスト者たちが、自分たちの礼拝に相応しい聖歌を、と考え、多くの聖歌を作り出したのです。

こうして考えてみると、どんな聖歌を私たちが様々な状況の可能性のある礼拝で歌うのか、ということは私たちの宣教についてチャレンジを受けているといっても過言ではないでしょう。

私たちはここ日本にいても、共感のできる素晴らしい聖歌を多く紹介したいと、翻訳をしています。しかし、私たちが一番望んでいるのは、各地の宣教の場、礼拝の場、生活の場からのみなさんの聖歌が生み出されることです。
(聖歌集改訂委員 加藤啓子)

礼拝音楽担当者会報告

秋深い11月8・9日の両日、杜の都仙台基督教会に於いて、第8回教区礼拝音楽担当者会が開かれました。例年の如く各教区から1名ないし2名の礼拝音楽担当者が集まり、聖歌集改訂委員会(以下「委員会」と略)のメンバー、管区職員、傍聴者を加え約50名弱が、なごやかな中にも真剣な討議と交わりの時を過ごしました。

開会礼拝の後、最初に委員会からこの1年間の活動報告が、続いて各教区からの報告がなされました。

主な内容は委員会側からは、今年5月の日本聖公会総会に合わせて『改訂古今聖歌集試用版』(以下『試用版』と略)ガイドブック「心は賛美に満ちて」を発刊したこと。委員会のメンバーの変更で新たなメンバーを加え8名が決定したこと。9月末に『試用版』別冊「礼拝式文用曲譜・朝夕の礼拝」(以下『チャント』別冊と略)を発刊したことなどが報告されました。

各教区の担当者からは、教区内での『試用版』の使用状況をはじめ、『試用版』の紹介と実際に歌う会の開催によって、徐々に、あるいは画期的に教区内に『試用版』の存在を広める努力がなされていることなどの報告がなされました。委員会では、教区によって異なりはするものの、全体を通して『試用版』はおおむね好意的に受け入れられはじめていているという印象を深くし、大変意を強くしました。

『試用版』を実際に使用しはじめていらっしゃる教会からの感想、疑問点の指摘、要望などをまとめてみると、肯定的なものとして歌詞が身近でわかりやすく心に染みる。

昇階唱に使用できる曲が多い。歌詞が楽譜の間にあって見やすい。メロディーの良い

曲が多い。現代の曲、オリジナルの曲が多い、などの意見がありました。一方で、復活節の曲に暗い曲が多い。楽譜の間の歌詞が見えにくく、オーガニストも弾きにくい。歌詞が散文的で言葉数が多く説明的な歌詞が多い。歌詞のイントネーションと旋律型が合っていない。歌詞と音符のはめ方で疑問のある箇所がある、などの意見も聞かれました。いずれにしても委員会としては、まだ『試用版』を使っていらっしゃる教会は、まずは実際に手にとって『試用版』を開いて下さることをぜひお願いしたいところです。

夜のセッションでは、『チャント』別冊の紹介や、『試用版』の聖歌の紹介にあわせ、それらを歌ってみる学びの時も持たれました。

まとめとして担当者会自体に目を向けてみると、開催の回を重ねるごとに担当者と委員会との距離が縮まり、共通意識も生まれ、協力体制も整い、自然の流れの中で充実した会の進行が出来るようになりました。これは委員会にとっては大変心強いことです。委員会の今後の方針として、現行の古今聖歌集の原詩に当たり意図を尊重して訳し直したり、省かれている歌詞を回復して新しい聖歌の中に加えていく作業をはじめ、新作の訳詞、推薦聖歌の見直しなどの作業を順次進めていく中で、担当者の皆様、協力教会のお力添えは何にも増して大きな支えです。どうぞ今後とも宜しくお願い致します。

全員による感謝の聖餐式を済ませ、来年九州での再開を約束しながら、喜びのうちに今年度の礼拝音楽担当者会は終了し、雪の舞う仙台を後にしました。(文責 青木瑞恵)

第8回礼拝音楽担当者会に出席して

東京教区礼拝音楽委員会
セシリア斉藤響子

「私のような不勉強者が何っていいの？」
と思いつつも、他の教区ではどのようにやっ
ておられるのかと興味津々で今回初めて参加
させて頂きました。

《セッション1 / 聖歌集改訂委員会と各
教区の報告 / 8日午後》様々な取り組みや悩
みに頷いたり驚いたり。中部教区での青年層
の自発的な働きのお話には、未来は明るい
ぞ！と叫びたくなりました。

《セッション2 / チャントや答唱詩篇の
解説と練習 / 同日夜》この会の礼拝では、最
近発行された試用版別冊『礼拝式文用曲譜、朝
夕の礼拝』（通称『チャント別冊』）をたっぷ
り使いました。教区の礼拝は別として、自分
の教会では使う可能性の低そうなチャントの
数々を初めて実際に歌い、皆で使ってみよう
よ、という気分に。

《セッション3 / 質疑応答と分かち合い
 / 9日午前》と聖餐式で会は終了。

このような会では、新しい動きへの対応の
早さを問われているという印象になりがちか
も知れません。しかし早ければいいというも
のではありません。日本キリスト教団のK牧
師の言葉です。「(教団が最近発行した新しい
賛美歌集の)新曲や詩の応募が多かったのは
東北や中部など。導入ぐあいも同じです。特
に東北が進んでいます。誰もが大きな声で民
謡を歌う文化があるためでしょうか。都会の
方が難しいです。豊かな感性は都会でない所
の方がいるように思います。」貧弱な感性で試
用版に向き合わないように、また、人と情報
が集まりやすい都会ならではの良さは何なの
か、と考えさせられました。

仙台基督教会では多くの方々のご参加、ご

協力があつたことも印象的でした。このよう
な機会を与えて下さったことを主に感謝致し
ます。

教区礼拝音楽担当者会に出席して

中部教区 渋沢博子

第8回教区礼拝音楽担当者会が、初雪舞う
東北教区仙台基督教会を会場に行われ、中部
教区の担当者として出席した。

会の内容は 各教区の礼拝音楽の現状の分
かち合い、「試用版」発刊以降の改訂委員
会の作業の報告、9月に発刊された「朝夕
の礼拝、詩編曲譜」を学び、夕の礼拝、就寝
前の祈り、朝の礼拝、聖餐式にて実際に歌う、
等であった。限られた時間の中で、多くの学
びが与えられた2日間であった。

新共同訳聖書の実現、祈禱書改正に伴い、
礼拝用書としての聖歌集の改訂作業が続けら
れているが、2006年総会には現行古今聖
歌集、'95増補版、改訂古今聖歌集試用版の
3冊が、500~600曲収められた1冊の
改訂古今聖歌集として誕生予定とのこと。期
待したい。

各教区の改訂聖歌集等の使用状況は、毎主
日必ず何曲か使用している教会から未だ古今
聖歌集のみという教会と、日本聖公会の広さ
と温度差を感じる報告だった。

中部教区では、教区フェスティバル、90
周年記念教区礼拝で、改訂聖歌や、新しいチャ
ントを使用したり、青年たちによる改訂聖歌
試用版全曲録音のCD配布等を通し、教区全体
として改訂聖歌はだいぶ身近なものとなりつ
つある。

新しいものに取り組んでいくことは、なか
なかエネルギーの必要なことだが、この日の
礼拝のこの箇所にあふさわしい聖歌を選ぼうと

すると、私たちの群れが賛美したい歌、神さまに
 応答したい歌、この世界に宣べ伝えたい歌
 を見つけるためには、どうしても新しい聖歌
 が必要だと思う。

実際の改訂作業は、同じ信仰をもつ何人も
 の手を経て、その思いと努力の積み重ねで、一
 曲一曲が生まれていることを覚えない。

まず、礼拝で使ってみることで、この改訂作
 業に私たち一人一人が参加できる時に巡り
 あっていることを喜び、大切にしたい。

礼拝における音楽の役割を知れば知る程、
 オルガニストの役割の重さを痛感する。改訂
 聖歌はテンポ表示が無いが、それはそれぞれの
 会衆によって一番良いテンポを見つければ
 よい、ということである。そのためには奏楽者
 はどんな曲か知り、会衆が歌いやすいように
 リードしていけるよう充分練習してほしいと
 いう改訂委員の方の言葉が印象深い。

中部教区では、毎年伝道区毎に改訂聖歌の
 講習を行い、参加者を募っているが、改訂委員
 会と各教会のパイプ役としての教区礼拝音楽
 委員会の働きを思うと、もう一歩より多くの
 方たちへの理解のためには、各教会への出前
 伝達の必要性も感ぜずにはいられない。

担当者会の翌日の主日は、東北教区各教会
 に分散し、私は福島聖ステパノ教会の礼拝に
 出席させていただき、暖かい交わりの時を与
 えられた。お世話いただいた東北教区の皆様
 に感謝したい。



いまさら・・・でも聞いてみたい聖歌 集改訂への素朴な質問

(ジモンさんとカイティさんの対話)

ジモン：

2001年に『改訂古今聖歌集試用版』(以下
 『試用版』)が発行されましたが、この後も100
 曲くらいを収めた『第二集』『第三集』とかを
 出される予定ですか？その時は、できれば、
 もっと安価で出していただきたいのです
 が・・・。

カイティ：

『試用版』のように販売される歌集を、出す
 予定はありません。けれども、改訂作業の進捗
 状況に合わせて、新しく改訂・翻訳・創作され
 た聖歌の中から、順次『聖歌集改訂ニュース』
 に添付しますので、各教会でそれらを歌って
 みてください。

また、「『試用版』なのに高いゾ」という声は
 しばしば耳にしますが、印刷製本代や著作権
 使用許諾などの費用から見ても、妥当な額で
 す。カバー付きの表紙も、割安であったこと
 をご理解ください。今一度お考えいただきたい
 のですが、五年間という期間限定でこそあれ、
 その間、礼拝のために用いられる歌集が、あの
 価格で高いと思われませんか？「聖公会手帳(小
 版)」と同じ額ですよ。あ、聖公会手帳買わな
 い？なら論外ですが・・・。

ジモン：

2006年に「本格改訂版」(以下「本格版」)
 が出されると、現行『古今聖歌集(1959年版)』
 (以下『古今』)は、もう使えなくなるのです
 か？惜しい気持ちが強いです。

カイティ：

2006年に発行する「本格版」は、現行『祈
 禱書』に準拠した礼拝用書であり、日本聖公会

の礼拝生活・宣教・伝道に深く関わる性格のもので、従って、それが総会で承認されることにより、『古今』は、使用期間を終わることになります。また、『古今聖歌集増補版 '95』も『試用版』も、「本格版」に取捨選択されて含まれるので、それらの歌集も使わないことになります。ただしこれは、あくまでも「聖歌集」という一冊の礼拝用書としての使用を終了するということですので、個別の聖歌についてもまったく歌ってはいけない、というわけではありません。特に、「愛唱聖歌」などとして取り上げられる場面が想定されますので、それらについては牧会的な判断に委ねられるでしょう。

ジモン：

「本格版」の全体構成はどうなりますか？

カイティ：

現状では、『試用版』が拡大されたものとお考えください。つまり『試用版』は、「本格版」のダイジェスト版です。もう少し丁寧に申し上げますれば、聖歌が500～600曲、そのうちの半分は『古今』から改訂されたものです。もちろん詩・曲ともまったく変わらないものもあります(『試用版』2058番、2106番などがそうです)。また、礼拝用曲譜(チャント)も『祈祷書』に準じて、朝夕の礼拝、聖餐式、その他の諸式、詩編などが用意されます。本年9月に発行・配布されている『別冊 礼拝式文用曲譜、朝夕の礼拝』は、その一部ですのでご覧ください。

ジモン：

その『別冊』はどこで買えますか？

カイティ：

これは、『試用版』の一部でもあるので、『試用版』を購入された方に無料配布しています。できるだけ教会ごとにまとめて、管区事務所へお申し込みください。尚、この『別冊』は、『試用版』のカバーのポケットにうまく入るようになっています。

ジモン：

「本格版」には収められないで「削除される聖歌」があると聞いたのですが、それはどうやって知ることができますか？

カイティ：

聖公会出版で販売されている「『試用版』ガイドブック・心は賛美に満ちて」(1,200円)に、付録として「評価チャート」に、詩・曲を五段階評価した表が収録されています。1996年の総会に報告された資料です。でも、これは決して絶対的な評価ではないことと、評価時期からすでに時を経ていきますので、削除評価から変わったものもいくつかあります。

ジモン：

『試用版』や改訂について、色々意見がある場合、どこへもっていけばよいですか？

カイティ：

もちろん、聖歌集改訂委員会宛てとして、管区事務所にお送りくださることを拒むわけではありませんが、各教区の礼拝音楽担当者(礼拝音楽委員会など)でとりまとめていただくことを基本にしています。また、それらのご意見は、何度も歌ってみてからにさせていただきたいと願います。出来れば、礼拝で実際に用いてみた上で、ご意見いただけることを望んでいます。

今回の添付楽譜について

古今聖歌集 7番

「イエスキミキタリテ」で始まるこの降臨節の聖歌は、多くの人々に親しまれており、みなさまの中にもお好きな方がおられることと思います。

降臨節は、間近に迫った主イエスのご降誕を待ち望むと共に、もう一度この世に来られる主イエスを待ち望む時です。特にもう一度この世に来られる主イエスを待ち望みつつ、私たちは降臨節を過します。

聖歌第7番の原詩を調べましたところ、再び来られる主イエスを待ち望むことを強調した内容となっていましたので、今回の改訂でも再び来られる主イエスを待ち望むことを4節において明確にいたしました。また各節においても原詩の内容をなるべく忠実に取り入れられました。

なお現在の1節の最後は「みつかいのうた」となっていますが、原詩には御使いはどこにも出てきません。一方古い時代の原詩には御使いが出てきます。このような原詩変化の背景は、再び来られる主イエスを待ち望むことを重要視した結果と思われる。

古今聖歌集 18番と20番

いずれも、クリスマスには必ず歌われる大切な聖歌ですが、その詩の中に「不快語」が含まれており、それを解決するという教会の現場における必要に応えた改訂試案です。現行『古今聖歌集』の詩は、原詩の内容を的確にとらえた、まことに格調高い名訳であるので、全体の詩の質を崩さないように配慮して作業しました。ご意見・ご提案をいただければありがたく思います。

・18番は、第2節「いやしき賤(しず)のおとめに宿り」の部分で、「貧しく低きおとめに宿り」と改訂しました。

・20番は、第2節「賤の女(め)のいやしかるをもいとわで宿る神のみ子」を改訂しました。原詩には、「神よりの神、永遠の光よりの光よ。見よ！彼はおとめの胎をいとわれず、父なる神より出づる唯一のみ子である」とあり、「ニケヤ信経」(祈祷書167頁)や「賛美の歌」(27頁)などを反映したものです。「おとめの胎をいとわれず」という表現は、古来よりの信仰告白の定式ではありながらも、今日では議論を招くものとなっています。上述した試訳、また『讚美歌21』においても訳出を避けているように、今回の改訂試案でもそれに倣っています。結果、改訂試案を「神よりの神なるみ子よ おとめマリアに宿りたもう」としました。

古今聖歌集 25番

この聖歌は、原詩および1922年版『改訂古今聖歌集』(50番)では5節までありました。その第3節は、「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない」(マタイ8:20、ルカ9:58)との主ご自身のみ言葉から編まれています。そこで、今回の改訂は、1922年版に収められていた第3節を回復しました。その他の節も、詩・曲ともに改変せず、結果として1922年版からの回復という形となりました。また、内容的に見て、降臨節以外にも歌えるものにとらえ、「イエスの地上の生涯」という項目として収められます。

発行：聖歌集改訂委員会

ご意見・ご質問は日本聖公会管区事務所まで

〒162-0805 東京都新宿区矢来町65

TEL 03-5228-3171 FAX 03-5228-3175

E-mail: hymnal.po@nsskk.org